

今月の特選句 八木健選

親の脛卒業旅行含まれて (井野ひろみ)

句に起承転結が透けて見える。意外な展開に呆気にとられる可笑しさ。入試の費用に学費・・・終わった と思ってしまった親の唾然が

持て余す女虎一匹花さじき (佐藤古城)

酒乱は男の専売特許じゃないという可笑しさ飲みなよ、飲めんだろ。部長だからと威張るんじゃないよ。  
馬鹿ろ、今日は飲むぞ ウイ

口づけのあの時よりの春の風邪 (西をさむ)

好きなひとの風邪ならもらってもいいと・・・あのときは確かに思ったがあれから熱が冷め風邪の熱だけは続いているんです。  
コン畜生

姿見をやうやく抜けし花衣 (永島董王)

信じられないほど時間をかけるお化粧ですね。花衣ともなればなおさらのこと。姿見に映してからだを振るから  
イテテテ筋肉痛に・・・

どつしりと上座に座り新社員 (高田敏男)

新人類・・・という流行語が懐かしいですなあ。ワタシらもかつてはそんな風に言われたんだ。謙譲の美德を覚えた頃にはあ定年退職なんで

行く鴨を横目で見てる浮寝鳥 (高橋 郁)

世の中に寝るほど楽があるものか浮世の馬鹿が起きて働く・・・なんてあれは都都逸でしたか。  
北国へ帰りた奴は帰りあいいんだ

今月の秀逸句 七七をつけてみました

噂まく人の種撒く手付きかな (清水吞舟)

村に欠かせぬ情報部員

なににしてもしんがりのまま卒園す (越前春生)

一周遅れのトップランナー

一番と呼ばれ張り切る春の風 (北村真佐子)

鶏頭となるも牛後のたとえ

上官や雪の上では部下が上 (柴田真一)

しごくチャンスを逃してならぬ

畦焼きの眉毛焦がして戻りけり (高田菲路)

太い眉して動きの鈍く

デジタルもネットも知らず古雛 (藤原セツ子)

携帯を五人囃に持たせたい

たまに靴磨いてくれば春の泥 (前川敏夫)

電車に乗れば全線ストップ

西暦で書いて叱られ年度末 (伊藤浩睦)

仏の顔も三度までとか

来客の指先で拭く春埃 (麻生やよひ)

黄沙の一句詠ませてごらん

麦踏の黙々歩む蟹歩き (井口夏子)

寒くて口を開けられないよ

海胆食ふて生簀の魚に睨まる (有富洋二)

そんな気がただけじゃないのか

まだ売れぬ建売住宅土筆摘む (稲沢進一)

土筆摘み付き住宅として売れ

伏目がちにおはす大仏花粉症 (有吉堅二)

大仏さまに苦手なものが

青木治敬

初花やトロの食える日が伸びし

春時雨喫茶の三時女声のみ

節分や皿に残る豆多くなり

青山桂一

いづくかと目を凝らし見る揚飛雀

鳥声をB・G・MIに摘む土筆

鳥の声板につきたり春なかば

高橋マキコ

春闘の団結の声掠れたる

満開の桜襲ってくるがごと

せせらぎにちぎり絵となり花筏

高橋 都

年金となりて食材花の野に

本当はめだちたがりや野水仙

秋月裕子  
春寒く抱かれるように遺影抱く  
暖かや歌声喫茶の仲間たち  
関西に寒のもどりて勘狂う

麻生やよひ  
鷹鳩と化し闘争心置忘れ  
来客の指先で拭く春埃  
春彼岸男女同権道遠く

足立淑子  
梅雨雲をスカイツリーが食べつくす  
新入社員そろそろか五月病  
道おしえ絶滅危惧のサイン出す

有富洋二  
海胆食ふて生簀の魚に睨まるる  
おざなりに座した頭へ花吹雪  
退職の朝のニュースや四月馬鹿

有吉堅二  
柳にも好きな風ありなよなよと  
「お久しぶりです」と春蚊のご挨拶  
伏目がちにおはす大仏花粉症

安藤淑子  
訛る売手吾も訛りて路を買ふ  
春眠の夢の楽しく大遅刻  
夫は施設妻は苦楽の春愁

飯塚ひろし  
入学期親に大望子に小志  
花咲くや離婚届も吉日に  
世の中に偽装はびこる日永かな

井口寿々子  
春愁の鶴なり小さく小さく折る  
愛用のコーヒーカップ春愁  
さりげない言葉がうれし春愁

井口夏子  
植木市夢はでつかく大庭園  
私を詩人にさせる花吹雪  
麦踏の黙々歩む蟹歩き

高橋素子  
蝶つがい草の庵の戸を閉ざす  
マスクして顔を失ひたる人よ  
貸した目を返して貰へず目借時

高松雄三  
茎立ちの荒れた畑の畝作り  
カラフルなホームセンター種物屋  
老入の入学年齢合格ぞ

田代陽光  
チューリップ子らの絵はみな前向きに  
餌ばつかり取られとります小鰯釣り  
目隠しのしだれ桜の人目ひく

田中章子  
春泥やチョコレート屋に凝る子供達  
お玉杓子親の顔見ておどろきぬ  
虻の飛び気になる眉の阿修羅像

田村米生  
新入生もうお互ひに意識して  
ペンギンのぶくぶく沈む花筏  
汐干狩股座ごしに貝を見せ

飛田正勝  
杖突いて仰ぐ杖つくさくらかな  
でしやばりのお米の居ない路地の冷え  
この先は個人情報春の夢

永井一朗  
履きもせぬ沓に仕へり仕丁雛  
お一人はかんばせ雛の矢大臣  
初雛の主にごよなき美辞麗句

永島董王  
神童と呼ばれたことも四月馬鹿  
姿見をやうやく抜けし花衣  
行く春をちびりちびりと惜しみみて

西　をさむ  
吾輩にマドンナの居てうかれ猫  
子規にまで程遠くあり彼岸寒

原田　曄  
雁風呂やゆきどころなき皮下脂肪

池田無了  
啓蟄やまだ生きとるぞ戦中派  
春うらら威風堂々負け相撲  
花の世は魑魅魍魎も恋と酒

伊藤浩睦  
屋根替や木久蔵ラーメン伸びており  
おれおれと鳴く鷺のいて山笑う

稲沢進一  
東京を驚かしたり春の雪  
春昼やコップに酒の溢れたる  
まだ売れぬ建て売り住宅土筆摘む

井野ひろみ  
親の脛卒業旅行含まれて  
足跡は新聞配り雪の朝  
耕転機真直ぐ進む春の土

今城夏枝  
桜咲く別ればかりを眺めみる  
如月のトンネル出口無き如き  
この谷に散るほかはなし山桜

越前春生  
堅すぎる草加煎餅亀の鳴く  
音のなき世をさまよひて朝寝かな

奥脇弘久  
糰や元横綱の赤んべえ  
春寒や防犯カメラ右ひだり  
ほおけてもかをり保てり路の臺

岡部一兆  
リハビリの息の近きや近松忌  
長睫毛美形の中のよだれかな  
湯気立ちて観音現る又沈む

笠 政人  
つくづくし袴を脱ぎて洗はるる  
遠き日の連れ小便や草萌ゆる  
浮かれたるあとは淋しき花筵

可知豊親  
背き合ひ利き手で招く望潮  
印刷の目玉で威す袋掛

春嵐髪逆立てて税務署へ  
ねこ路地のおほよそ二十浮かれ猫

彦阪義久  
もう悟り開いたやうだ冬が去る  
お水取り秘密トンネル非公開  
冴え返る勘忍袋破れそう

久松久子  
剣豪の里山かんから笑ふ  
奴胤に覗かれ年金数へけり  
虎刈りの子もみた昭和野焼跡

日根野聖子  
饒舌の突如中断春の雷  
蜆汁滋味のしみじみ沁みわたる  
飛び方のどこか不器用初蝶の

藤岡蒼樹  
桜鯛切り身園児のバター焼き  
句作りの精米店主雀の子  
畦塗りの粘り失敬燕の巢

藤森荘吉  
笑ひ皺増えてきたよな春炬燵  
春の風邪転地療養でもするか  
うららかや暇さへあればリラックス

藤原セツ子  
爪染まる土筆のハカマ剥ぎ取れば  
寝たきりの人を誘惑涅槃西風

二神重則  
かすむ郷護ると鉄塔背を伸ばす  
讃岐路や浮ぶ稜線春の夢  
休耕日かすみの衣着ける里

坊野留吉  
タンポポや帰化手続きは済ませしや  
ひらひらと被ひ給はる花見莫座  
春キャンプ腕よりサイン磨きたり

前川敏夫  
公達の顔で出てくる雛の市  
げくげ田や子に負けてやる相撲

穀象を我も真似たや死んだふり

加藤 賢

逝く春のマドンナ口を窄めたる

鶯のホーと引張りすぎて止む

減量の妻よ春の野が広し

加藤澄子

白鳥につつかれている枝垂花

宇宙船で奏でる琴の春雅び

春になり冬になり異常気象の春せわし

川島智子

反面を削られし山半笑ひ

温暖化に無駄な抵抗春吹雪

すみれ咲く宝ジェンヌに遠き我

北村真佐子

まどろむの時のコチコチ春眠し

ものの芽の喉ごくごくり雨しとど

久我正明

毛皮脱ぎ白湯につかる竹の子や

風の来てさつと一筆土筆かな

シロウオの飛び板飛び込み口の中

工藤泰子

春風や善悪どつち二面石

つちふるや卑弥呼の墓といふあたり

たんぼぼや棚田の抽選会の列

倉方 稔

花冷えや伊達の薄着を悔いもして

蛇出たぞ活かす殺すとへボ碁打つ

生き活きと蛇穴を出で行方不明

黒澤正行

白燕赤信号に止まりけり

風邪ひかぬ筈の馬鹿まで花粉症

牛に告ぐ尾振り厳禁花の道

黒田忠一

啓蟄や内視鏡もて覗きみる

春泥をたつぷり浴びてはしご酒

大丈夫か大部丈夫だ薄氷

松尾軍治

オシッコの夢より覚めて春の闇

菱マラをつまんではなす四月かな

春は恋キスはするもの惚れるもの

松田吉憲

隠沼の深きに迷ふ蛙の子

園長の声に似てゐる鬼の声

人形の髪の毛びてゐる臍の夜

丸山紘一

「トロ喰ふな」言はむ許りの春嵐

買ひ溜めのマスク恨めし卯月入り

釣るよりも冷やかし多し春の川

三木蒼生

とりたてて用などなくて朝寝せり

おねしよではなくて御手塩に花菜漬

大阪にメタボの増えて春場所来

三塚不二

董草よけるも踏んで又踏んで

花の宴寺塔の鴉押し黙り

シャッターの好位置確保日脚伸ぶ

三橋一笑

春一番奴の「サヨナラ」吹き飛ばす

蹴飛ばされ缶カラカラカラ春の坂

おしやべりは御馳走なりと春の卓

虫倉蟬音

燕の子口開け見上ぐ男の子

おてんばの行つたり来たり茅の輪かな

耳覆ふ代田の蛙揃ひ鳴き

むつみ

欠陥の公表遅れ春の闇

腰にせし懐炉ポトリと便の壺

徘徊の少し遠出や春の夜

村上美和

サーカスのテント高々下萌る

ふらここや今日のピエロはよく喋る

春炬燵テレビを切れば起きる父

百千草

小杉 隆  
如何ならん「梅に雀」と構えしが  
髭こするサインの花冷ゆ甲子園  
春雨に行交ふ傘は八の字かな

桜井宇久夫  
春雨にビニール傘のまた一本  
卒業式漫画本捨てて武道館  
I Tの若者に説く花見の礼

佐藤古城  
色々な鼻が揃うて花見莫座  
花の下ふたごが潜る母の股

佐藤義子  
天気まで移り気とは落ちつかない  
今ふうは回すより押すが主流  
再会し一年振りに大はしやぎ

佐野萬里子  
黄砂降る愛車すつぼり白塗りに  
菜種梅雨裕好よりも長靴で

佐野ゆきこ  
店先で営業妨害日向ぼっこ  
絵八ガキの英文わからず投函す  
鬼は外福は腹の中節分の豆

柴田真一  
春嵐甘い世人を嘲笑ひ  
重役会花粉防除で終了す

清水呑舟  
一番やビリは昔や豆の花  
小雀と領け合ふ妻の手焼きパン

首藤虎男  
ドンブリを山と積み上舌高さ  
千成のことわざ九十九易易諾す  
蜂刺して苦痛の余り逃げ遠し

壽命秀次  
一對の白鳥隠れ沼めくや  
強かな妻のしをらし春花粉  
何ごとも無きごとと帰還や恋の猫

いたづらに長き信号春時雨  
蘆の角子は七人の敵をもつ  
シワシャツの形に朝寝貧りぬ

森岡香代子  
筍の匂はぎとられ里の山  
花びらの競争水面ゴールまで  
谷川の水の色して蕨餅

森 要  
花よりも酒酒酒が何時も季語  
初めての孫娘生り雛祭  
期末だな鼻寄り談合臭い金

八木 健  
痩せるほかなし流水旅に出て  
よそ見してゐる間にももの芽の伸びる  
季語の土筆やパソコンで書かれたる

柳澤京子  
春愁や喜寿迄命ほしけれど  
空の旅宝のみやげ桜餅  
死の予感血圧200越えし春

山内重昭  
迷い子は六つと八つ夕桜  
子が探す親は酔漢花の下  
噛みついた奴も仲間だ亀の鳴く

山ノ内杜士子  
ダイエット早くも挫折竹婦人  
桜散る舞台衣装を脱ぐ如く  
窒息す真空パックの初鯉

山下正純  
燭台の火を待つばかり白木蓮  
順繰りとあくび杏子の花笑ふ  
玉椿真白きうちに落ちにけり

山本あかね  
ほんたうに昼の蛍のやうな人  
いま引きしはうれんさうのお浸しよ  
黄水仙指名手配書貼り出され

山本けい子  
春野菜あふれIHの台所  
さくら咲き髪分け目の変へられる

白井道義

独り身の褥に潜る恋の猫  
春愁や優先席を譲り合ふ  
大凶にあつけらかんと受験の子

杉村福郎

飯蛸のすねて小皿に三つかな  
鞆は愛され過ぎてひいこひこ  
重咲く蛇鳥えつさか駈け廻り

鈴木和枝

豆を拾い拾い人間界に近よるハト  
何やらカタコトめじろの恋  
この指止まれとねぎ坊主

高田敏男

ぜんまいの弾け日時計進みけり  
うつかりと四月二日に嘘を言い

高田菲路

禿頭を撫でて風花消えにけり  
干されのある尿瓶を鳴らし春の風  
縮みたる嬰のふぐりや冴え返る

車椅子寄り道をして木瓜の花

山本 賜

菜の花やスズメが減つたさうですよ  
山葵田では道祖神わさびを守る  
花見茶屋だんご七個の串だんご

横山喜三郎

給食に未練を残し卒業す  
花便りサイタサイタの戦前派  
返すこと忘れし踵春うらら

吉田恵子

石落ちるように飛び込む群れ目白  
人はみな髪逆立ちて青嵐  
落ち椿スポットライト当てたいな

渡辺さだを

啓蟄や浮気蟲が出てきたか  
仔犬いつも尿する場所や木の芽吹く  
黄沙降る街覆面をして歩き

渡邊美代子

愛の結界不時着したり秋の蝶  
地下鉄が地上を走る菊日和  
公達の流れといへど慈善鍋